

ICT を活用した新たな資源管理システム構築事業

イカナゴ漁場環境調査

倉田恵吉・勝田孝司・羽生和弘

目的

伊勢湾におけるイカナゴの資源管理については翌年度親魚量 20 億尾をとり残す、とり残し資源量一定方針が行われてきたが、近年資源減少が著しく、平成 28 年から 5 漁期連続で解禁見合わせとなっている。沿岸海域の温暖化や貧栄養化等の動向を把握し、イカナゴ資源への影響と対策の検討を実施するとともに、資源管理に取り組む漁業者に情報提供する。

方法

1 沿岸海域の温暖化や貧栄養化等の動向把握

イカナゴ資源量が減少した主な理由は親魚量不足と考えられ、その原因の一つとして、夏眠場の水温上昇が疑われる。夏眠場の海底水温データを把握するため、鳥羽市神島沖の鯛ノ島礁周辺の海底に水温計を設置し水温測定を実施した。

結果および考察

7 月 23 日～11 月 30 日の期間について、過去に夏眠場

が確認された鯛ノ島礁周辺の海底（図 1、◇印、水深 22～23m）に水温計を設置し、海底水温の測定を実施した。

海底水温が最も高くなると考えられる 7 月から 8 月の期間（実測：7 月 23 日～8 月 25 日）では、最高水温がイカナゴ夏眠魚の生残に悪影響が出はじめる水温 25℃を超えた日が 17 日間（前年ほぼ同時期 11 日間）観測され、7 月 23 日～11 月 30 日の期間全体では水温 25℃を超えた日が 27 日間観測された。

イカナゴ資源が減少した原因の一つとして、夏眠場の高水温化により、夏眠魚が減少したことあるいは夏眠魚が衰弱して成熟できずイカナゴ資源の再生産に繋がらなかったことが考えられる。夏眠場の海底水温のデータは乏しいため、引き続きデータを収集し、既存の水温データ等と併せて解析を行うなど、イカナゴ資源の減少要因の究明に取り組んでいく必要がある。

また、伊勢湾口での夏眠魚調査による親魚量や仔魚分布調査による仔魚の加入量などと併せて、調査結果を漁業関係者に情報提供し、漁業者が行う資源管理の支援を実施していく。



図 1. 海底水温の測定位置

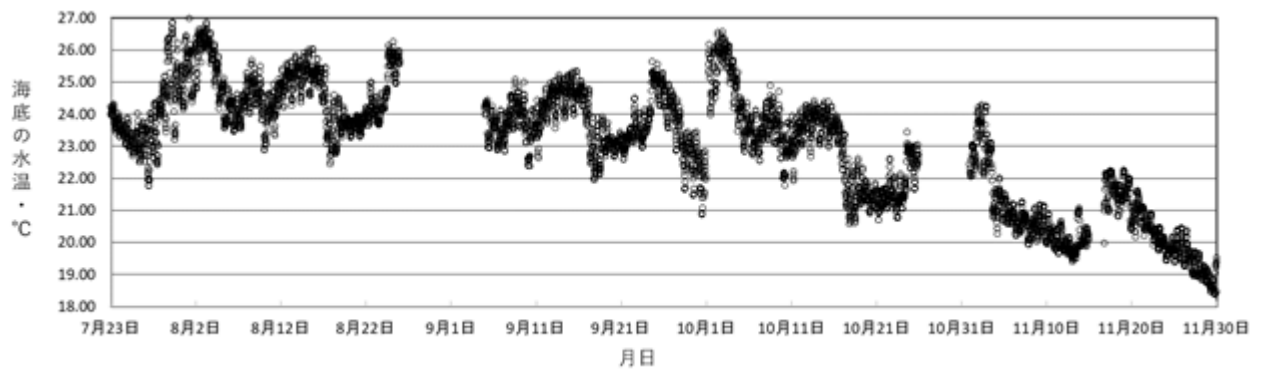


図 2. 鯛ノ島礁周辺の海底水温測定結果